

宮崎大学跡地遺跡発掘調査報告書Ⅰ

FUNA TUKA

船塚遺跡



1987

宮崎県教育委員会

宮崎大学跡地遺跡発掘調査報告書Ⅰ

FUNA TUKA

船塚遺跡

1987

宮崎県教育委員会

序

宮崎県教育委員会では、宮崎県総合文化公園構想の一環として県立図書館新館の建設を進めております。宮崎大学跡地周辺は遺跡に富み、そのため建設予定地内にも遺跡が残されている可能性が高いため、建設に先立ち発掘調査を実施しました。

発掘調査の結果は、遺跡そのものの状態はあまりかんばしいものでなかったものの、弥生時代から古代にかけての遺物を得ることが出来ました。その中でも、埴輪片の出土は、予想外の大きな成果となったようです。

宮崎平野の一角の歴史を解明する、これらの成果が学術関係者だけではなく、社会教育や学校教育の分野にも広く活用されると共に、文化財保護行政推進のための一役となることを期待します。

昭和62年3月

宮崎県教育委員会

教育長 船木 哲

例　　言

1. 本書は、宮崎県立図書館新館の建設に伴い、宮崎県教育委員会が実施した船塚遺跡（宮崎市船塚3丁目210）の発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、昭和61年7月10日から同年8月13日まで実施した。
3. 本書の執筆・編集等は、北郷泰道が行った。
4. 下北方古墳群関係の埴輪資料については、県総合博物館蔵の資料を実見、実測し、活用させていただいた。
5. 出土遺物については、宮崎県総合博物館埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

| | |
|----------------------------|----|
| 序 例　　言 | |
| 第 I 章　序　　説 | 1 |
| 1. 発掘調査に至る経緯 | 1 |
| 2. 遺跡の位置と環境 | 3 |
| 3. 発掘調査の経過 | 4 |
| 第 II 章　発掘調査の結果 | 6 |
| 1. 遺　　構 | 6 |
| 2. 遺　　物 | 9 |
| 第 III 章　考　　察 — 下北方古墳群と船塚遺跡 | 11 |
| 1. 下北方古墳群 | 11 |
| 2. 円筒埴輪の位置付け | 16 |
| 第 VI 章　結　　語 | 23 |

挿　図　目　次

| | |
|---------------------|-------|
| 第 1 図　遺跡分布図 | 2 |
| 第 2 図　発掘位置図 | 5 |
| 第 3 図　基本土層断面図 | 5 |
| 第 4 図　遺構配置図 | 7 ~ 8 |
| 第 5 図　溝土層断面図 | 6 |
| 第 6 図　遺物実測図(1) 幼生土器 | 9 |

| | |
|-----------------------------|-------|
| 第7図 遺物実測図(2) 高坏 | 9 |
| 第8図 遺物実測図(3) 墓輪 | 10 |
| 第9図 遺物実測図(4) 須恵器 | 10 |
| 第10図 遺物実測図(5) 布痕土器 | 10 |
| 第11図 下北方占墳群と船塚遺跡の位置 | 12 |
| 第12図 13号前方後円墳（1号）と円墳（2号）測量図 | 13 |
| 第13図 13号前方後円墳出土形象埴輪(1) | 14 |
| 第14図 13号前方後円墳出土形象埴輪(2) | 15 |
| 第15図 船塚古墳測量図 | 16 |
| 第16図 5号地下式横穴墓遺構と遺物 | 17~18 |
| 第17図 円墳と地下式横穴墓・副葬品の関係 | 19~20 |
| 第18図 13号前方後円墳出土円筒埴輪(1) | 21 |
| 第19図 13号前方後円墳出土円筒埴輪(2) | 22 |
| 第20図 1号前方後円墳表採埴輪片 | 22 |

図 版 目 次

| | |
|------------------------------|----|
| 図版1 C溝検出状況（南から）／C溝検出状況（北から） | 25 |
| 図版2 北から見た溝遺構の状態／西から見た溝遺構の状態 | 26 |
| 図版3 A・B溝の状態（北から）／D溝の状態（南から） | 27 |
| 図版4 東から見た溝遺構の状態／北から見たA～C溝の状態 | 28 |
| 図版5 A・B溝土層断面／D溝埴輪片出土馬辺土層断面 | 29 |
| 図版6 下北方占墳群遠景／船塚遺跡出土遺物 | 30 |

第Ⅰ章 序 説

1. 発掘調査に至る経緯

宮崎大学の学園都市への移転に伴い、その跡地利用として総合文化公園の構想が具体化され、その最初の事業として県立図書館新館の建設が計画された。社会教育課では、昭和60年8月1日付けで文化課に対し「文化財の所在の有無について」の照会を行った。大学跡地は周辺地に多くの遺跡が所在するにとどまらず、その敷地内においても古くから遺物の散布が知られる場所があった。⁽¹⁾文化課では、照会を受け、同年9月2日から6月までの5日間にわたり、文化課主任主事長津宗重、面高哲郎の担当で、新館建設予定地を含む周辺の試掘調査を実施した。12箇所にトレーニングを設定した結果、幾つかのトレーニングで土師器片などの遺物を検出し、東側に位置するトレーニング2本で溝遺構を確認した。いずれも、状態としては良いものではなかったが、同地の位置する歴史的な意義からも、同年10月7日付けで調査の必要性について回答した。

その後、遺跡の取り扱いについて協議した結果、昭和61年7月10日から2ヶ月程を調査予定期間として発掘調査を実施することを決定し、同年6月27日に発掘調査の通知を文化庁長官あて提出した。

調査組織

調査主体 宮崎県教育委員会

教育長 船木 哲

調査庶務 社会教育課長 栗田 浅則

庶務係長 藤本 健一

主 査 松原 明

調査担当 文化課長 永井 初志

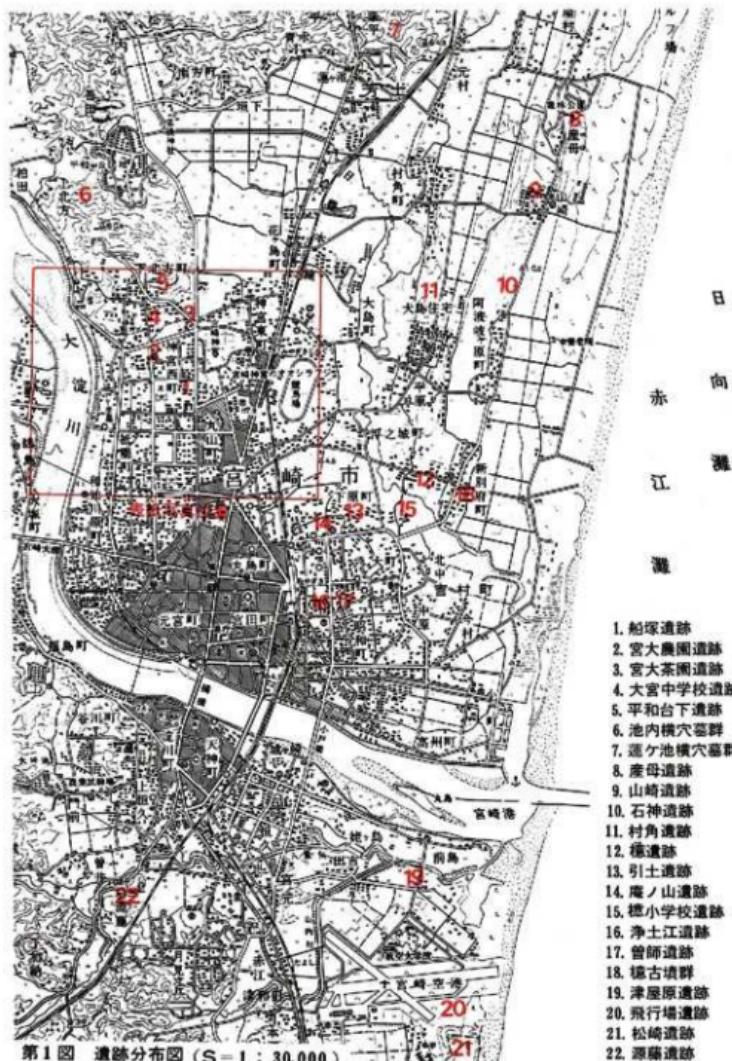
課長補佐 梨岡 孝

埋蔵文化財係長 田中 茂

主 事 北郷 泰道（文化課）

〃 谷口 武範（県総合博物館埋蔵文化財センター）

なお、調査の過程では森貞次郎氏（九州産業大学教授）から埴輪についての有益な御教示をいただき、関連資料調査では井沢洋一氏（福岡市埋蔵文化財センター）の御助言を得た。記して謝意を表します。



第1図 遺跡分布図 ($S=1 : 30,000$)

1. 船塚遺跡
 2. 宮大鹿園遺跡
 3. 宮大茶園遺跡
 4. 大宮中学校遺跡
 5. 平和台下遺跡
 6. 池内横穴墓群
 7. 遠ヶ池横穴墓群
 8. 厳母遺跡
 9. 山崎遺跡
 10. 石道遺跡
 11. 村角遺跡
 12. 横遺跡
 13. 引士遺跡
 14. 麻ノ山遺跡
 15. 標小学校遺跡
 16. 清土江遺跡
 17. 曾師遺跡
 18. 緒古墳群
 19. 津屋原遺跡
 20. 飛行場遺跡
 21. 松崎遺跡
 22. 露源浦遺跡

2. 遺跡の位置と環境

宮崎大学は、宮崎市街地の北部宮崎神宮に隣接する場所にある。大学の敷地内では、宮大農園遺跡、茶園遺跡と呼称される遺物散布地が古くから知られてきたが、これまでの調査などではむしろその北側の下北方台地上の遺跡が注目されてきたにすぎなかった。それは、県下の発掘調査が沖積台地上からなかなか沖積地へとその手を延しえなかつたこれまでの経緯からも首肯される認識であった。

船塚遺跡と呼称する今回の調査対象地は、大学敷地の中でも農学部に属する北東隅にあたり、標高は約8mを前後する沖積地にあたる。周辺地ははやくから宅地化されており、原地形の復元は困難であるが、微妙な地形の起伏をそうした中でも、足で確かめることは出来る。現在の地形から判断すると、農学部敷地は南側で標高9m前後と高く、北に向けて、すなわち今回の調査対象地にかけて緩やかに低くなるものと思われる。

宮崎市街地周辺において最も古く遡る遺跡は、旧石器時代の垂水公園遺跡があるが、縄文海進の時期、縄文早期の柏田貝塚の時期までは、現在の市街地は海面下であり、その生活跡を求めるることは出来ない。その後形成されたであろう海岸線に並列した、南北に延びる砂丘列上に弥生時代に入ると遺跡が立地するようになる。

砂丘列は4本認められるが、早くは弥生前期に最も内陸側の砂丘（第1砂丘）に櫛遺跡、（第1図12）が形成され、中期になると第2砂丘上に石碑遺跡（第1図10）などが盛んに営なまれるようになる。こうした状況は、大淀川の南岸においても同様であった。また、船塚遺跡の近くでは茶園遺跡（第1図3）の様相が断片的ながら採集資料から明らかにされており、それによると早くは前期末からの弥生土器が知られ、前述の砂丘列上だけではなく、沖積平野の中の微高地や台地の直下に生活の範囲が拡大していたことが分かる。

古墳時代に入っては、旧刑務所跡地の発掘調査によって5世紀代からの浄土江遺跡（第1図16）の実態が明らかになっている。現在の中心市街地で大規模に遺跡が確認出来るとしたら、宮大しかり、刑務所しかり、広い面積を占有した施設の移転以外には叶えられることではないであろう。そのような意味で、浄土江遺跡は教訓的な遺跡であるといえる。検出された堅穴住居跡は、5世紀代～6世紀代にかけて床面中央に焼土を伴う埋甕が設備され、やがて7～8世紀に入ると掘り抜きの煙道をもつカマド付堅穴住居となる。これらの住居跡は、隣接する国鉄宮崎駅周辺に所在したとされる広島古墳群と併行する時期のものを含み、重要な成果となっている。

古墳群としては、砂丘列上の櫛古墳群（第1図18）、台地上の下北方古墳群（第11図）が

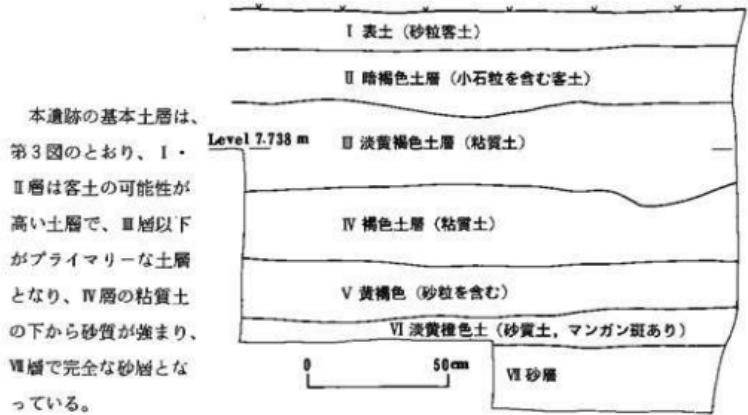
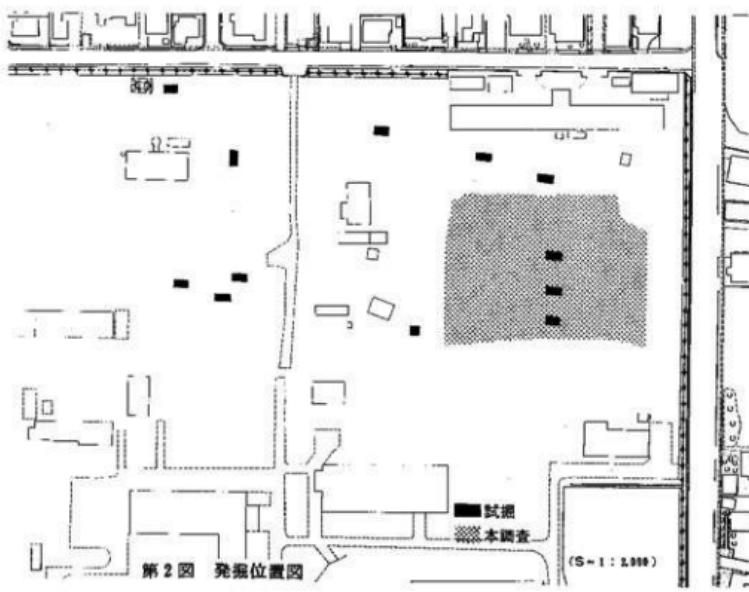
あるが、ことに下北方古墳群は船塚遺跡と一緒に考えられるべき古墳群といえる。そのほか、下北方の台地に連なる丘陵地に池内横穴墓群（第1図6）、さらにその東方に継続的かつ密接な関係をもつて連なる丘陵地には運ヶ池横穴墓群（第1図7）が所在している。

古墳時代以降の下北方の歴史については石川恒太郎氏の的確な記述があるが、「日向國田帳」（建久8年・1197）における宮崎庄300町と「日向國五郡分帳」（天正19年・1591）における宮崎南方100町、同北方100町、池内方100町への変遷、さらに宮崎北方の上北方と下北方への分別、そして今日まで残された地名から北方あるいは南方に奈良時代以来の都家を推定し、地理的な重要性からさらに下北方を推定されていることは、重要な指摘である。

また、近世に下っては延岡藩の代官所が下北方に置かれ、宮崎平野部における藩治の中心で、また宮崎県の籠県にさいし県庁が下北方に置かれる予定であったなど、現在でも「役所下」の地名呼称が残されていることなど、まだ史資料による不備はあるものの、下北方の地が重要な地であったことは明らかにされている。

3. 発掘調査の経過（調査日誌抄）

- 7月10日 重機による表土剥ぎに着手
- 7月14日 作業員による遺構検出作業を開始
- 7月18日 試掘において確認されていた南北に延びる溝を検出する。その西にも同じく南北に延びる溝を検出。一部溝内の掘り下げをはじめる。高坏片を溝底面より検出する。
- 7月22日 溝の掘り下げを継続するが、高坏片出土以来顕著な遺物の出土はみられない。又、柱穴らしき落ち込みは存在するが、いずれも掘立柱建物を構成する可能性は薄く、近時のものである可能性が強い。
- 7月23日 調査区北側の東西の溝から埴輪片出土。期待がもてる。
- 7月24日 溝からの埴輪片その他の遺物はその後みられない。
- 7月28日 重機による調査区の拡張を行う。
- 8月1日 遺構検出面の精査を続けるが、顕著な遺物はみられない。
- 8月7日 検出した溝の精査が最終段階を迎える。排土中から埴輪のタガ部と思われる破片を採集。（その後洗浄を経て検討した結果、弥生土器の突縁部と判断）
- 8月13日 平板により調査区全体図を作成し、調査を終了する。



第3図 基本土層断面図（縮尺 1/20）

第Ⅱ章 発掘調査の結果

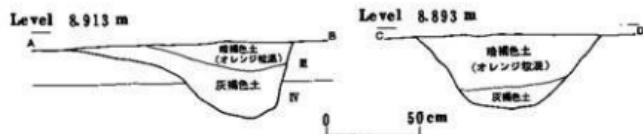
1. 遺構(第4図)

試掘の結果、溝の残存の確認された地点を中心とした約4,000m²について面的発掘調査を実施した。試掘からも知られていたように、I層表土、II層暗褐色土層までは擾乱のある各上層で、遺構と認められるすべてはIII層淡黄褐色土上面において検出されている。

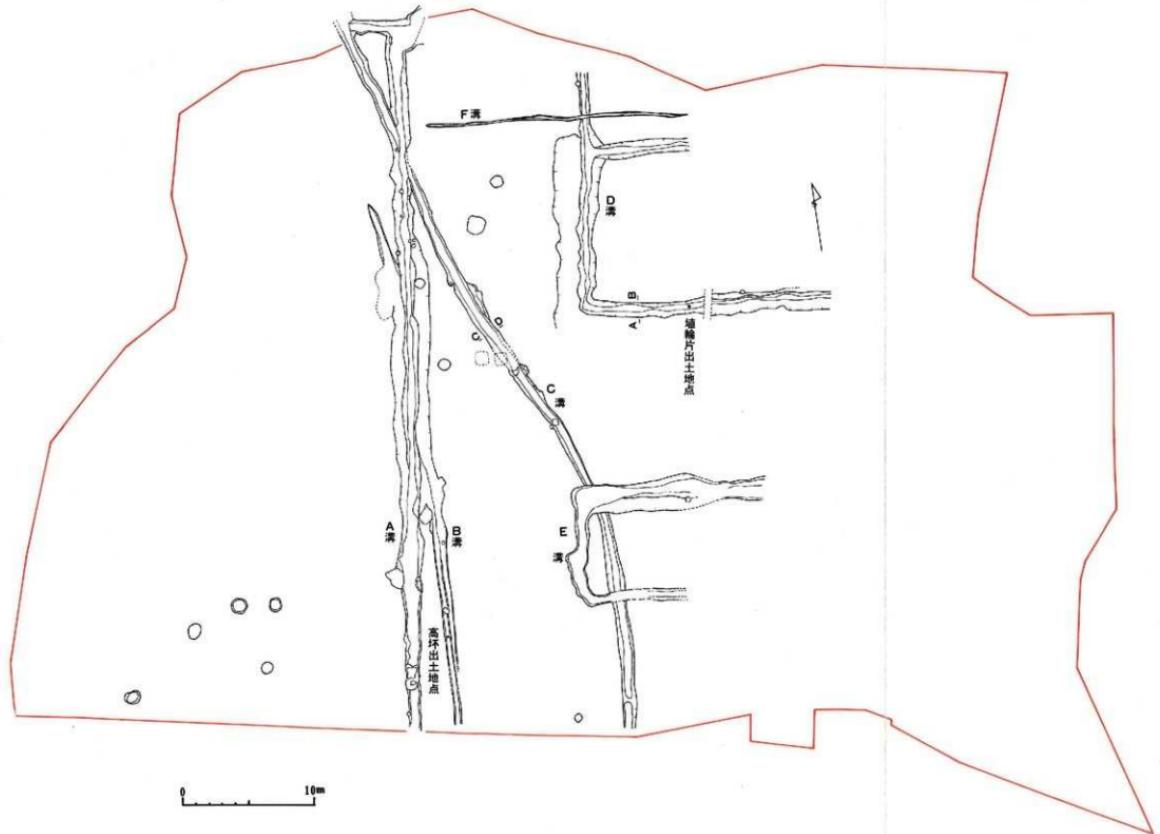
検出された遺構は、溝と土壤であるが、土壤はすべて近時点な擾乱を示すものと判断出来た。溝は南北方向に二本、南北方向ながらゆるやかに斜行する一本、調査区で確認出来た限りでは、東方向が開いて「コ」の字形にめぐる溝が二本、さらに細い東西の溝が一本である。南北方向の二本の溝の内より直線的なA溝は、調査区の北端で東西に延びる溝と直交する。A溝に添うB溝はやや斜行し、A溝と交わるが検出面での溝の深さが浅く前後関係は判断出来なかった。このB溝の南よりで高环片が出土している。A溝の北で交わるC溝は、A溝に先行する関係が認められた。C溝はその南で「コ」字形のE溝と重複している。E溝が後出するものである。D溝とF溝では、F溝の方が後出する。D溝の南の東西辺から埴輪片が出土している。埋土の状態から判断する限り、F溝が最も新しい。

それぞれの溝の時期を限られた出土遺物から検討すると、高坏を出土したB溝がわずか10~15cm程の深さを残すものであったが、床面直上での出土状態から、B溝を高坏の時期においてよいと思われる。これに対し、埴輪片を出土したD溝は、土層断面A-B地点でもみられるように南壁面が斜めに崩れている状況(第5図)が認められ、埴輪の出土も上面の暗褐色土中であり、流れ込みと判断される。また、他の埴輪片3片などの遺物等もI~II層除去の排土中からも採集されており、擾乱のある客土に含まれていた可能性が強い。

これらのことから最も古い溝はB溝、そしてC溝→A溝、D・E溝が後出し、F溝が最も新出のものと考えている。



第5図 溝土層断面図(縮尺1/30)



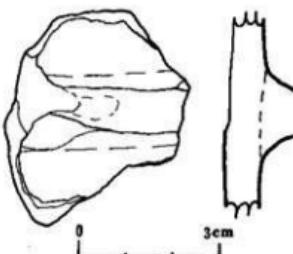
第4図 造構配置図 (縮尺1/300)

2. 遺物

弥生土器 (第6図)

弥生土器片と判断したものは3点ある。第6図は突帯部で、当初埴輪のタガ部に当たるものと思われたが、出土した埴輪片のすべての胎土と異質なうえ、突帯上下端の調整及び内面の調整が丁寧であることから、三角突帯の頂部が磨滅した破片と判断した。胎土は、砂粒が少なく精緻で、色調は黄橙色(7.5 Y R 7/8)を呈し、焼成は良好である。

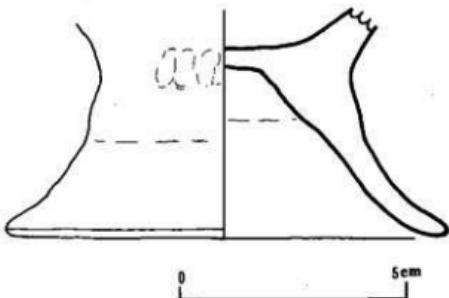
他に図版6に掲げた小突帯片及び刷毛目施された小片がある。



第6図 遺物実測図(1) 弥生土器

土師器 (高坏) (第7図)

土師器と思われる胸部片は數十点確認されているが、形式を知り得る唯一の資料が高坏(第7図)である。胎土には微細な石英砂を含み、全体にも砂質が強く、色調は黄橙色(7.5 Y R 8/8)を呈し、焼成は良好である。脚部径は9.8 cmを計り、底までの高さは3.8 cmを計り、底は薄くなっている。

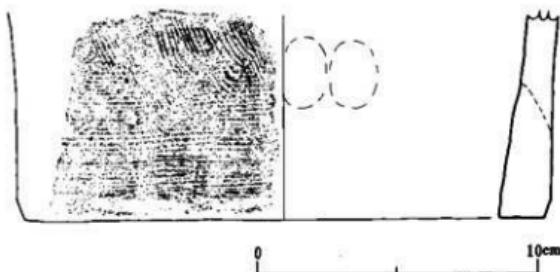


第7図 遺物実測図(2) 高坏

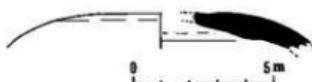
埴輪 (第8図)

埴輪片は小片をあわせ4点確認出来た。最も大きなものは約7×7 cm大的基部片(第8図)である。推定される基部径は18.6 cmで、ナナメハケメにヨコハケメが施されている。また、基部端部は斜めに面取られている。胎土には多くの雲母を含み、石英、長石、ほかに白色の

やや荒い砂粒を比較的多く含んでいる。色調はにぶい橙色（5 YR 7/4）を呈し、焼成は良好で堅く仕上っている。内面は荒い板ケズリである。また、他の3点とも同一破片と判断される。



第8図 遺物実測図(3) 壇輪（縮尺1/2）



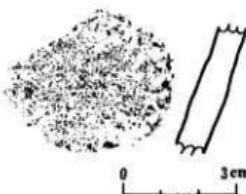
第9図 遺物実測図(4) 須恵器
(縮尺1/2)

須恵器（第9図）

試掘において確認された唯一の形状を知り得る資料である。杯蓋の天井部片とみられ、全体に磨耗が著しいが一部へら削りが認められる。胎上の砂粒は少なく、色調は灰色（7.5 Y 5/1）を呈し、焼成は良好である。

布痕土器（第10図）

布痕土器は1点の出土である。胎土の石砂粒は少なく、色調は明赤褐（5 YR 5/6）を呈し、焼成は良好である。織目は1 mm程の細かなものである。



第10図 遺物実測図(5) 布痕土器
(縮尺2/3)

第Ⅲ章 考 察 一 下北方古墳群と船塚遺跡 一

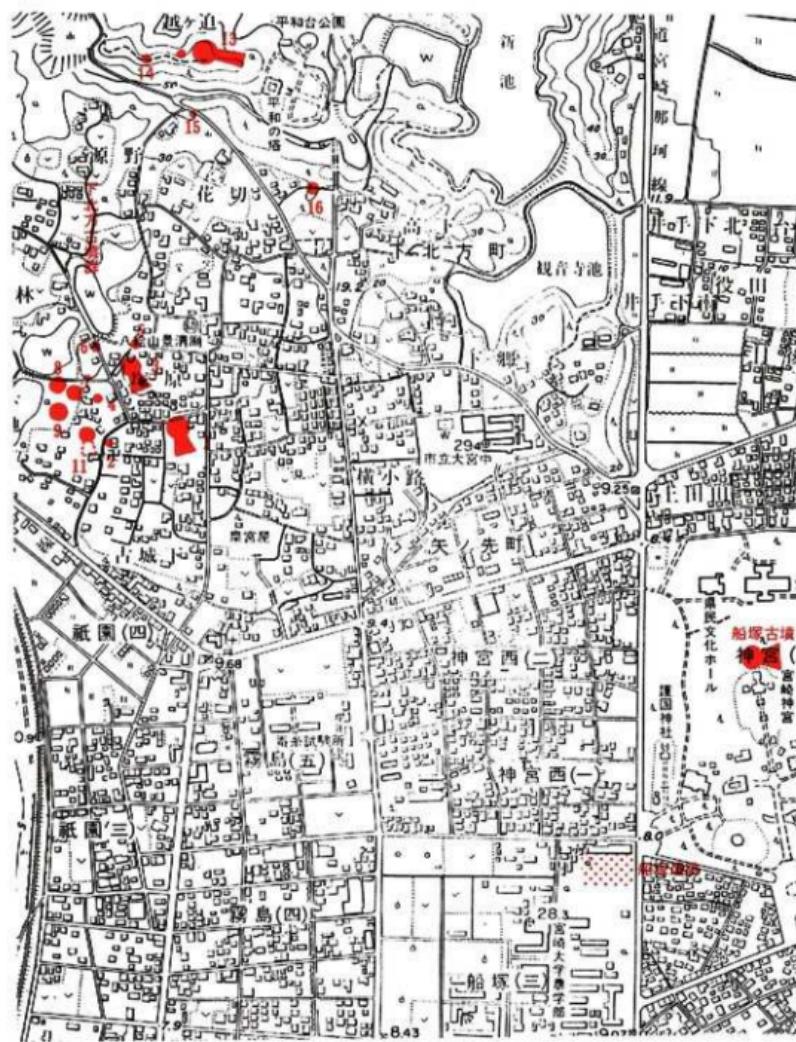
1. 下北方古墳群（第11図）

船塚遺跡の歴史的な位置付けは、下北方台地の歴史性を看過してはみえてこない。その中でも、古墳時代を中心にその展開をみておく必要がある。

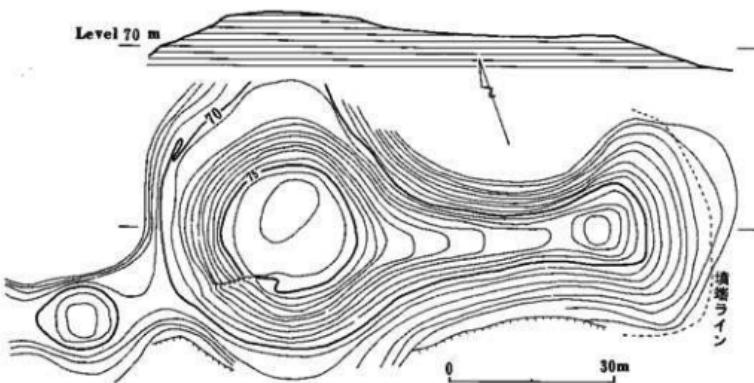
下北方古墳群は昭和14年4月21日に、船塚古墳は昭和52年4月1日にそれぞれ県指定史跡となっている。下北方古墳群は指定時において16基で構成されるものであった。しかし、現在では10、12号円墳が破壊消滅し、11号前方後円墳は前方部を失い、半壌状態で残されている。従って、現在残された古墳は、前方後円墳4基（1、3、11、13号）、円墳10基（2、4、5、6、7、8、9、14、15、16号）となる。また、地下式横穴墓が共存し、現在までに9基が確認されている。以下の記述は、指定古墳番号にそって行う。（第11図）

下北方古墳群については、昭和26年8月28日からの10日間前方後円墳1基、円墳2基について、発掘調査が齊藤 忠・鏡山 猛氏を迎え日向遺跡調査團の手で実施されている。⁽⁴⁾「1号」から「3号」まで呼称されているが、「1号」とされた前方後円墳が指定の13号前方後円墳で、「3号」とされた円墳が指定の16号円墳であるが、「2号」とされた円墳は、13号前方後円墳の西隣にあるものと思われ、指定の14号円墳とはその距離を異にするものであると判断される。指定時の方が古い時期であるので、この「2号」円墳が指定もれとなったのは理解に苦しむが、ともかく発掘報告書及び史跡台帳上の記載から追う限り、別の円墳と考えておくしかない。

発掘調査の結果、13号前方後円墳（第12図）は、前方部が2段築成、後円部が3段築成で、葺石をもち、主軸長110m、後円径40m、前方部幅30mの形態的には古式の古墳と考えられた。それはまた、当時の古式古墳の立地觀の上からも支持されるものであった。埴輪の樹立が検出され、円筒埴輪のほかに形象埴輪も全様が不明ながらも出土している。円筒埴輪については後に詳述するが、形象埴輪には人物、器材（第13図）、馬（第14図）などが認められる。⁽⁵⁾人物埴輪は腕のみで身体部は不明である。5は蓋あるいは短甲片、6、7は家あるいは、蓋の一部ともみられる。第14図は、胸部についての出土状態が記録されているように、動物であることは間違いない、その種類には幾つかの動物も考えられるが、馬とみておく。ただ1の頭部（眼を含む）片を一体のものとみれば、額部に表わされてよい面繫などの馬具類がみえないことから、別種の動物である可能性も高い。埋葬施設は確認されず、後円部で「綱型元寶」が出土している。



第11図 下北方古墳群と船塚遺跡の位置 (S = 1 : 10,000)



第12図 13号前方後円墳（1号）と円墳（2号）測量図（縮尺1/1,000）
（註4の実測図に加筆・作図）

「2号」円墳は、径10~15mで高さ1.7mの小型のものであったが、やはり形象埴輪片が出土している。

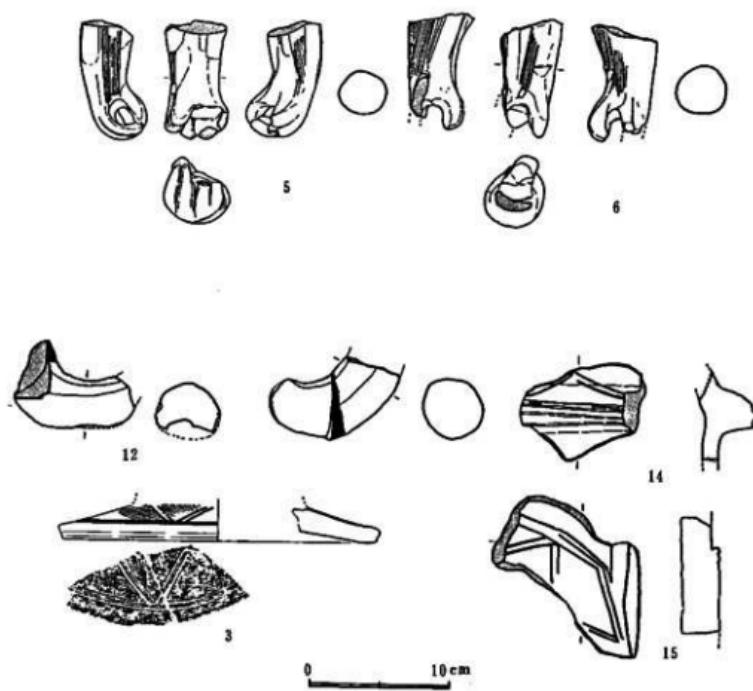
14号円墳は、埴輪が確認されず、検出された東西3m、南北1mに敷きつめられた砾は、「礎郭」と判断されている。

台地下にありた沖積地の前方後円墳では船塚古墳があり、測量図が作成されているが、上軸長76.8m、後円部径38m、前方部幅47m、やや前方部の高さがまさり、周濠をめぐらす新しいタイプの前方後円墳であることが知られている。（第15図）

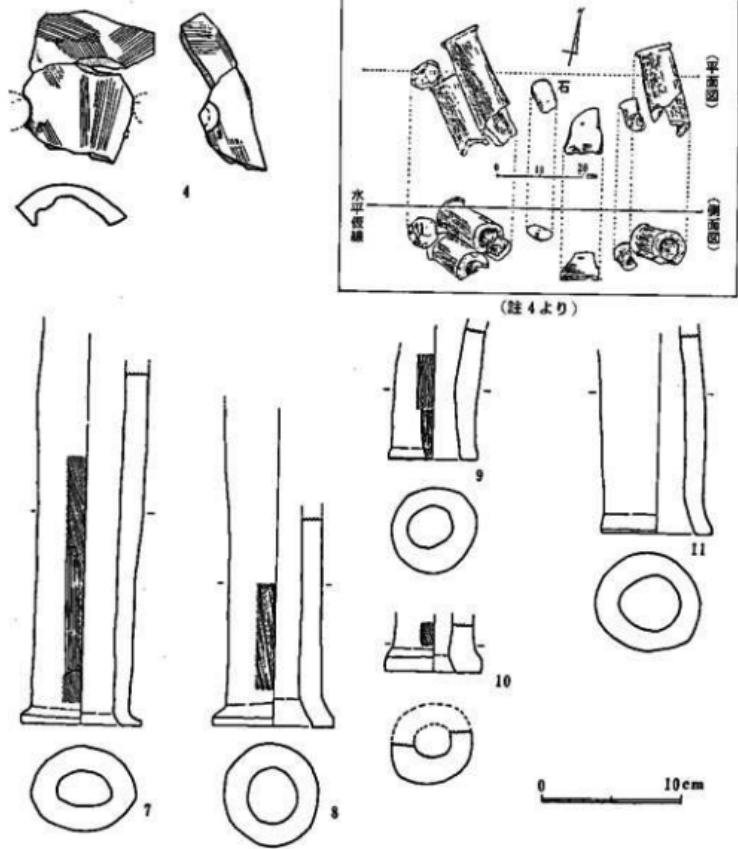
これら前方後円墳の系譜を追えば、11号が不明であるが、13号→1号→3号→船塚古墳となる。

一方、下北方古墳群にとって重要なのは、地下式横穴墓の存在であろう。現在までに9基が確認され、中でも出色の存在は5号地下式横穴墓（第16図）である。横矧板紙留短甲、三角板紙留短甲、頸甲、眉庇付骨、鉄劍、直刀、鉄鋒、鉄鎌、変形獸形鏡、変形紋鏡、勾玉、管玉、変形半円玉など玉類、金製垂飾付耳飾、鞍金具、鎧、杏葉、轡鏡板、三環鎧、馬鎧、手斧、鉄斧、鑿状鉄器、カギ状鉄器、鎌が副葬され地下式横穴墓の中でも極立った存在となっている。

また、下北方における地下式横穴墓は円墳、ことに7~9号円墳の墳丘下及びその周辺で濃密に検出されており、その位置付けも大きな課題となっている（第17図）。7号円墳の墳丘下に9号地下式横穴墓、その周溝から外に向けて6号地下式横穴墓、8号円墳の下に7号

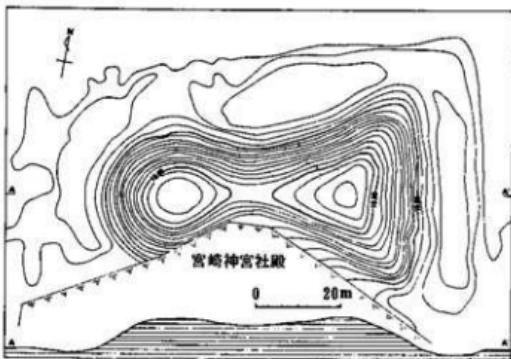


第13図 13号前方後円墳出土形象埴輪(1) (縮尺 1/4)



第14図 13号前方後円墳出土形象埴輪(2) (縮尺1/4)
(7~11は長津宗重氏実測)

地下式横穴墓、周溝の
陸橋部に外へ向けて8
号地下式横穴墓、9号
円墳の下に4、5号地
下式横穴墓がそれぞれ
検出されている。しかし、7、9号地下式横
穴墓は指定古墳下にあ
るため内部の発掘調査
は行われていない。4
号地下式横穴墓及び7
号円墳の周溝から検出



第15図 船塚古墳測量図 (「宮崎市の文化財」より)

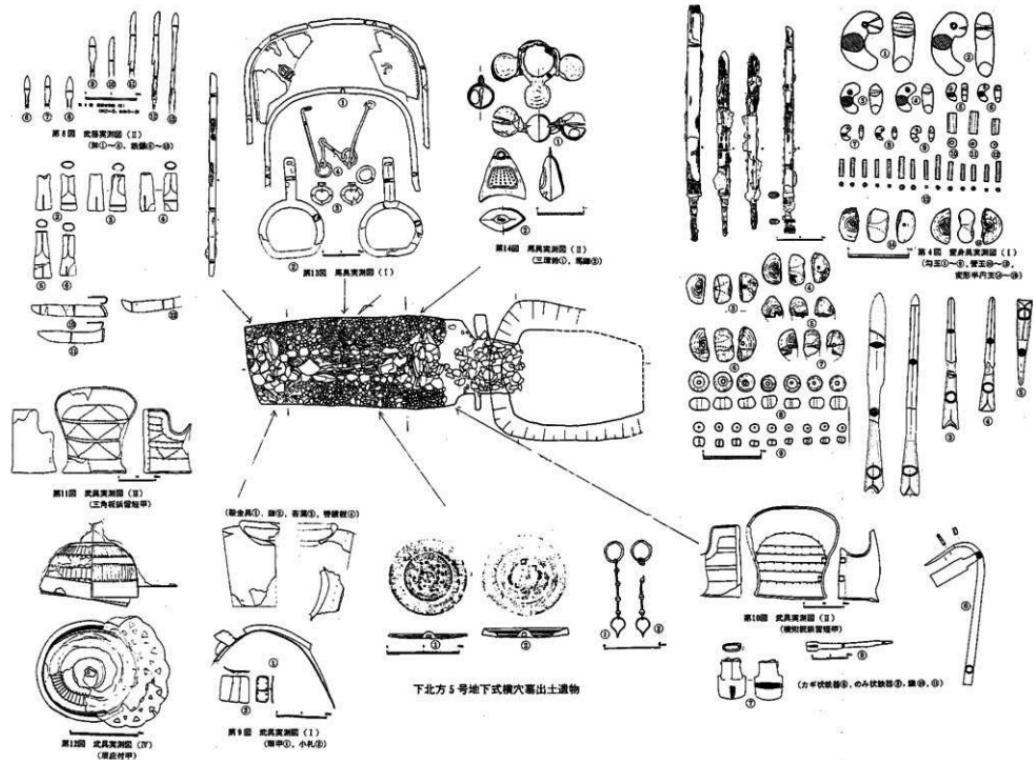
された須恵器の年代観はⅠ期に当たり、8号地下式横穴墓の竪坑出土の須恵器はⅡ期、5号
地下式横穴墓の竪坑出土の須恵器はⅢ期、6号地下式横穴墓出土の須恵器はⅣb期に相当する
ものと思われ。5世紀後半から6世紀に営まれたことが知られる。⁽⁷⁾

地下式横穴墓と高塚古墳（前方後円墳）との関係については、高塚と地下式横穴墓を主従的
的関係（政治的主体と軍事的側面）としてとらえるか、相対的に自立した首長権の繼承を認
める存在としてとらえるか、地下式横穴墓が主体をなす社会構成の中で地下式横穴墓自身が
首長権を繼承するものとしてとらえるかの三つの構成を考えたことがある。それは、地下式
横穴墓の社会を一面的に理解するのではなく、重層的かつ地域的変様の著しい、あるいはそ
うならざるを得ないところに南九州古墳社会の実相を見ようとする意図があった。そのよう
な意味からも、今後下北方台地周辺における墳墓だけではなく、集落跡、牛廻跡の解明も不
可欠の要素となっている。⁽⁸⁾

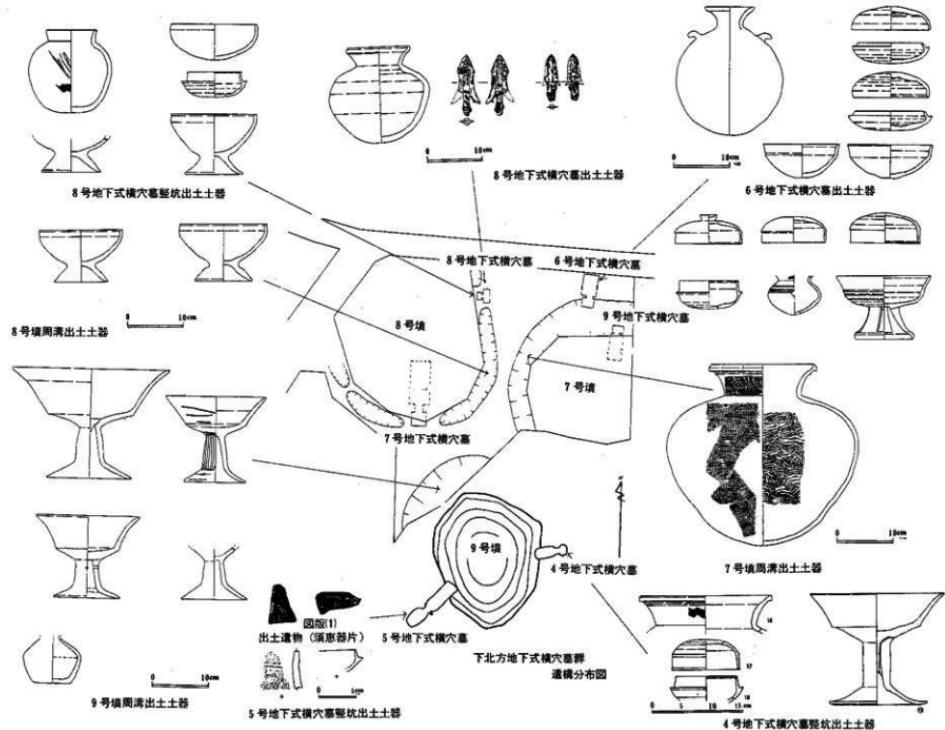
2. 円筒埴輪の位置付け

下北方古墳群において埴輪片の確認されている古墳は、発掘調査で確認された下北方13号
前方後円墳と隣接する円墳のほか、踏査の結果では1号前方後円墳で表採されているにすぎ
ない。船塚遺跡に最も近い船塚古墳では、埴輪片は採集されていない。

13号前方後円墳山土の埴輪には埴輪のもの（第18図）と須恵質のもの（第19図）との2種類
が認められ、そのいずれにもタタキの技法によって製作されたものが含まれている。



第16図 5号地下式横穴墓構造と遺物 (図集成 長津宗重氏)



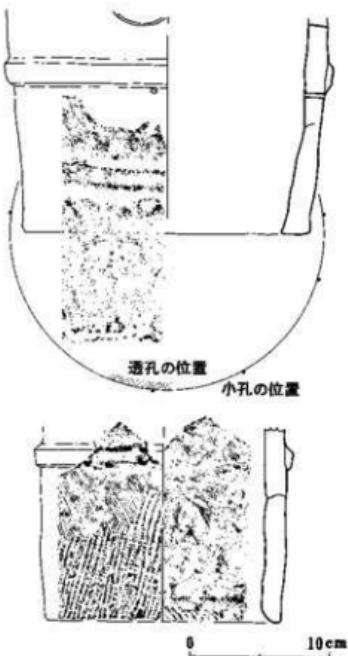
第17図 円墳と地下式横穴墓・副葬品の関係 (図集成 長津宗重氏)

第18図1はタタキのみられない基底部で低平なタガがめぐらされ、推定径2.4cmの円形透孔がタガ上部2.5cmの位置に認められる。また、タガ下位に接して5箇の小孔が認められているが、全体では2箇が単位となり3方向に、総計6箇の小孔がうがたれていたものと推定される。胎土には、石砂粒は少ないが、全体には砂質および、色調は明黄褐色(10YR 7/6)を呈し、焼成は良好である。基底部底径は20.6cmを計る。

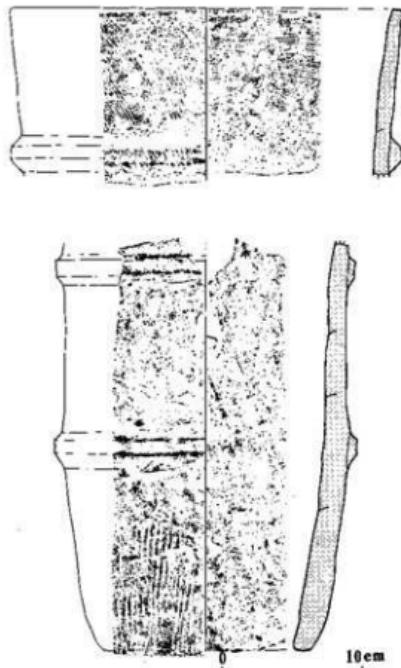
第18図2は、基底部底径17cmを計るやや小ぶりの円筒である。ナナメのハケメの上にタタキが明瞭に残されている。タタキは基底部底面にまで一部及んで認められる。タガは低く、下位の張り付け面は粗く、粘土の浮きが残されている。また積み上げた接面も内面には粗く残されており。

一方、須恵質のものとして第19図1、2を上げるが、ことに口縁部ではゆがみが著しくあることが破片から判断され推定径は確定的ではないが、1、2とも同一個体と思われるものの、径は復元された数値そのままを用いて作図している。タタキは基底部の下部にのみ認められ、上部はナナメ乃至タテのハケメである。タガは下位の2条は低平であるが、上位1条はややしっかりした形状を示している。胎土には石英、長石の砂粒のほか白色の粗い砂粒を含み、色調は褐灰色(7.5YR 6/1)を呈し、焼成は良好で堅致である。又、1号前方後円墳での表採埴輪(第20図)は、「コ」の字形のタガをもち、円形透孔が認められる。

胎土について、1号前方後円墳の埴輪の現物を直接観察出来なかったが、13号前方後円墳の埴輪と船塚遺跡出土の埴輪とでは、白色の粗い砂粒を含む点など共通した観察が可能である。従って、肉眼観察上同じ胎土を供給された窯で焼成された可能性が高いと思われる。しかし、時期的には船塚遺跡の埴輪がヨコハケを残し、それに対し13号前方後円墳の埴輪はタ



第18図 13号前方後円墳
出土円筒埴輪(1)(縮尺1/4)



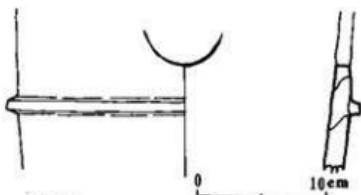
第19図 13号前方後円墳
出土円筒埴輪(2) (縮尺1/4)

跡に最も近くは船塚古墳が1基残存しているにすぎない。その隣接地の宮大敷地でどのような造成が、いつの時期に開始されたかつまびらかでないが、埴輪が造成された客土中に含まれるものであったとしても、遠くから運ばれてきたものだとは思えない。せいぜい敷地内の土の移動であったと考えられ、その中に埴輪をもつ古墳が所在したと考えた方が考えやすい。しかし、埴輪は、それ以上を許す資料のない現時点では、そこに留まらざるを得ない。

テハケのみ、そしてタタキ技法の導入など新しい段階のものと認めざるを得ない。一方、大まかには、船塚遺跡の埴輪を5世紀後半期に入るるものとし、13号前方後円墳の埴輪を6世紀前半期の中に入るものとして考えておきたい。

そうした時、立地上高位な丘陵上にあり、自然地形を利用しつつ築成された、下北方台地周辺において最も古式と考えられる13号前方後円墳に先行して存在する古墳が、台地上ではなく沖積平野面に立地していた可能性が出てくる。もちろん、埴輪の年代観は継承された儀式の最終的、ないしは下限を想定させるものであり、13号前方後円墳自体の成立はそれ以前に考えることも可能である。しかし、現在的には相対的に先行する古墳の存在を船塚遺跡の埴輪は小脇してくれていると考えておくしかない。

では、船塚遺跡の埴輪は遺跡の中でどう位置付けられるのであろうか。船塚遺



第20図 1号前方後円墳表探埴輪片

第IV章 結語

船塚遺跡の調査は、明瞭な遺構、遺物にとぼしい状況ながら、出土した遺物の1点1点が重要な意味を示唆するものであった。

弥生土器片は、遺跡の北1kmの茶園遺跡の存在とも関連を考えねばならない時期のもので、当該期に沖積地の微高地 — 現在は宅地化され、市街の中心になっているが — に生活が拡大していたことを示している。弥生土器片は中期末～後期初頭に位置付けておきたい。

埴輪片の存在には多くの課題が残されようと思う。今後の跡地利用に伴ない同敷地内の発掘調査が進めば、また関連の遺構、遺物が解明を促してくれるであろう。5世紀後半期におさまるであろう埴輪片の存在は、下北方古墳群の成立とその展開そのものに大きく関わるものであり、従米の13号前方後円墳を出現期とし、その変遷を追う考えに新たな知見を加え、古墳群の出現がさらに占く遡る可能性が出てきた。

須恵器、土師器の出土については、当該期の遺構が確認出来なかったことから、その位置付けを明確にすることは出来ない。しかし、布痕土器の時期まで、下北方台地と一体の中平野部の経営に重要な役割を占めたことは間違いない、今後当該期の解明も大きな課題として残されたといえる。

註

- (1) 口野 岩「宮崎の鉄製鍊窯跡」『日向文化』第4号（1950年）
- (2) 石川悦雄「日向考古資料Ⅰ」「研究紀要」宮崎県総合博物館第10輯（1985年）
- (3) 石川恒太郎「地形および歴史的環境」「下北方地下式横穴第5号」宮崎市文化財調査報告書第3集（1977年）
- (4) 石川恒太郎ほか「宮崎市下北方古墳調査報告」「日向遺跡調査報告」第1編（1952年）
- (5) 註4の報告書の中では出土した埴輪についての詳述はない。従って、ここに上げた資料は県総合博物館に収蔵されている資料を長津宗重氏と検討し、実測図を作成したものであり、かならずしも全様をとらえたものではない。
- (6) 註3に同じ。
- (7) 福尾正彦「宮崎県内出土の須恵器」「古文化叢書」第6集（1979年）
長津宗重「市の湖地下式横穴墓群」「内富町文化財調査資料」（1986年）
時期については、上記文献を参考とした。

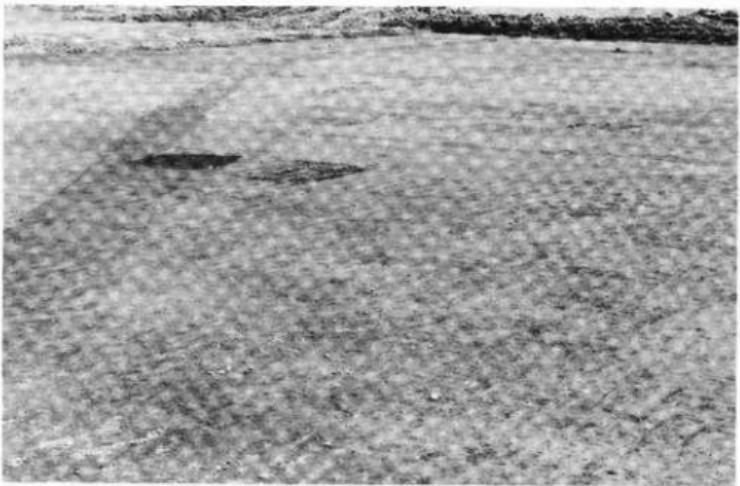
(8) 北郷泰道「南境の民の墓制」『えとのす』31 (1986年)

図 版

図版 1



C溝検出状況（南から）



C溝検出状況（北から）

図版 2



北から見た溝遺構の状態

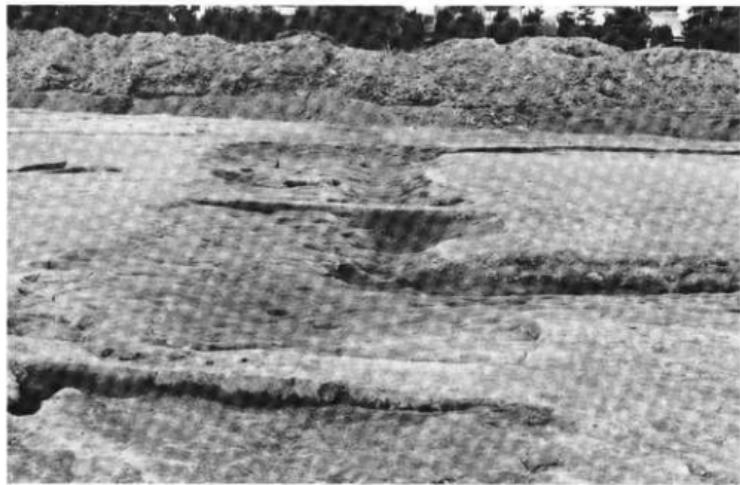


西から見た溝遺構の状態

図版 3



A・B溝の状態（北から）



D溝の状態（南から）

図版 4

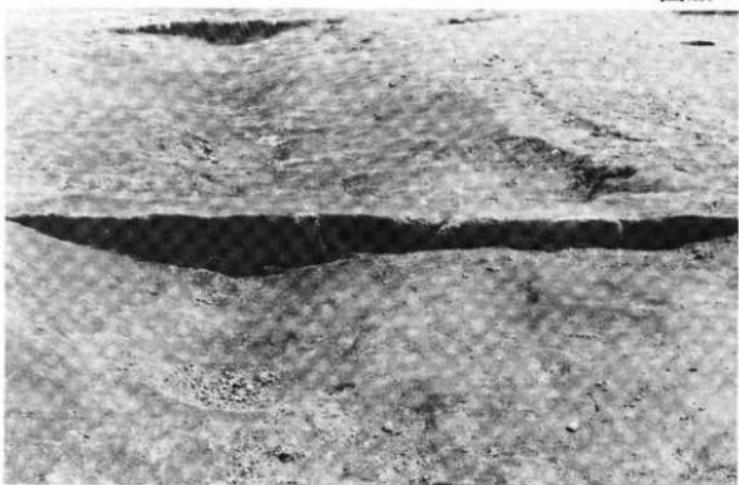


東から見た溝造構の状態



北から見た A ~C 溝の状態

図版 5



A・B 溝土層断面

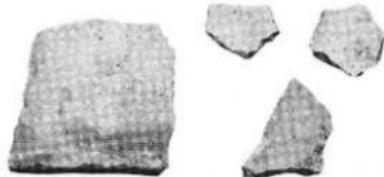


D 溝埴輪片出土周辺土層断面

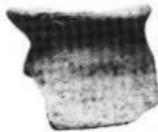
図版 6



下北方古墳群遠景



埴輪



高環



胎生土器

船塚遺跡出土遺物

宮崎大学跡地遺跡発掘調査報告書Ⅰ

船塚遺跡

1987年3月31日発行

発行 宮崎県教育委員会